

妖術に対する防御：防御施術

治療が効果を見せず、問題が拡大あるいは深刻化していく、あるいは、一回ごとの治療で一時的に好転するものの、また別の災厄に繰り返し見舞われる、こんな場合、妖術使いの攻撃が予想していた以上に手ごわく、また執念深いものであることが疑われる。治療と敵のより強化された攻撃のイタチごっこで埒が明かない、治療が敵の攻撃に追いつかない。敵の正体に見当がついている場合もあれば、そうでない場合もある。こんな状況でも、敵の正体を究明し告発するという手段に出る前に、まだできることがある。それが妖術使いの攻撃から自分の身を守るための、あるいは屋敷全体を守るための防御の施術である。単なる治療の施術に比べて費用は桁違いである（註 費用）が、後に見るように、それは単なる防御ではなく敵に対する攻撃の側面も持っており、試すだけの価値はある。

クフィニューワ・キルメ (ku-finywa chilume)

妖術の攻撃に対する防御の施術をうけることは、一般にクフィニューワ・キルメ (ku-finywa chilume) ——直訳すると「男らしく圧縮される、捻られる、押し狭められる」の意——と総称される。さまざまなやり方があり、より強力であるという触れ込みで、「技術革新」が最も激しい施術の領域の一つであるとも言える。1990 年前後には、施術の仕上げに仔猫を伏せた箕の下に入れて、その上で何度も飛び跳ねて踏み潰すという猫好きにはなんとも言えない施術が、あらゆる妖術攻撃に有効な最も強力な施術として人気があった。

クフィニューワ・キルメを受けることを、「キルメを手に入れる (ku-pata chilume)」と言ったり、「男らしく成熟した (ku-komala chilume)」などと言ったりもする。呪詛 (bako) の決まり文句のなかに「もしお前が本当に男なら」というフレーズがあるが、これは「もしお前が妖術に対して本当に備えができていけるのなら」という意味で解釈される。もちろん女性もこの施術を受けることができ、その場合は「クフィニューワ・キケ (ku-finywa chiche)」——キケ (chiche) はキルメに対して女性、女性らしさの意味——と言われることもある。術を施された女性は、「おとこ女 (muche mulume)」と呼ばれたりする。防御施術を意味するスワヒリ語の単語カーゴ (kago) をそのまま用いて、「カーゴを受ける (ku-kagbwa)」 「カーゴを食べる (ku-rya kago)」という言い方も普通に用いられる。

施術に用いられるムハツの効き目としては、患者がもし妖術使いに仕掛けられたムハツを踏んでしまったとしても、その効き目を無効にしてしまうという触れ込みのものもあるが、普通に知られている施術は、患者の身体のかなかにムハツを、一種のキラボのように仕込み、患者に妖術をかけようとする者にカウンター攻撃をかけるというものである。このタイプは、単に患者が二度と妖術の攻撃を受けないようにするだけではない。万一患者が気の迷いから妖術を使ってしまうと患者自身を殺してしまうだろうという。キラボであれば、これは不思議ではない。キラボは、誰であれ特定の行為をした者を攻撃せよというコマンド構文によるムハツの使用であったことを思い出そう。患者自身が妖術を使うことも不可能になってしまうのだが、これはけっしてこのタイプの施術の短所にはならな

い。むしろこの施術を受けた者は、その事実をそれとなく周囲の人々に知ってもらうようにする。彼（彼女）に妖術をかけようとする者を牽制することになるばかりではなく、彼（彼女）には妖術を使うことができないのだと知らせることにもなる。もちろん周囲の人々がそれを信じるかどうかは、また別問題であるが。

クフィニューワ・キルメの実例

前章で登場した施術師キメラにより行われたクフィニューワ・キルメの施術を、具体例として紹介しておこう。施術の対象は故チョガ（仮名）の二人の未亡人カハソ（仮名）とヂネ（仮名）であった。前年のチョガの突然の死は、妖術のせいだと疑われていた。三箇所占いの結果はそれを裏づけたものの、彼を殺した妖術使いが誰であるかについては、人々を妖術告発に踏み切らせるに足る明確な答を出さなかった。そしていまや、残された二人の未亡人の身にさまざまな災いが降りかかっていた。この日の施術では、最初に二人の患者に対してフュラモヨと棘の妖術のクブェンドウラが行われ、締めくくりがクフィニューワ・キルメであった。紹介する施術は、クフィニューワ・キルメの施術としては、奇をてらった演出——深夜、全裸での施術とか、地面に墓穴を掘ってその中で行うとか——をほとんど伴わない「基本形」と呼んでよいもので、日没時にキメラの施術場で行われた。

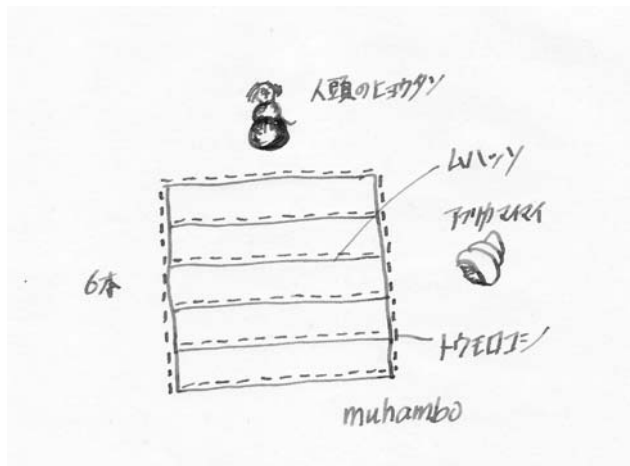
（１）薬液は前もって用意されていた。この施術に先立つクブェンドウラの薬液を用意する際に、同時に用意されていたらしい。クフィニューワ・キルメ施術は二人同時ではなく、それぞれに対して別個に行われた。最初はカハソに対する施術。この施術の中心となるムハッソはアフリカマイマイの殻のなかに入っている。このムハッソに対する唱えごと。

「サラマ、サラミーニ。ムヒよ、奴隷よ、使役される者よ。捕まえろと言われれば、お前は捕まえる。放せと言われれば、お前は放す。今、私はこの者（カハソ）にしっかりと妖術をかける（Vivi ninamuloga kamare kamare yuyu mutu.）私はトウモロコシの細粉とともにこの者に妖術をかける。水とともにこの者に妖術をかける。この世に、ワリ（wari トウモロコシの練り粥）を食べない者はいない。この世に水を飲まない者はいない。大地を踏みしめることのない者はいない。私は命じる。これ以降、あの者（妖術使い）がムハッソとともにカハソの名を口にする事あれば、お前キテマ（chitema）よ、その者を切り裂き、引きずり降ろせ。その者を殺せ。その者を殺せ。ムツァンガ（mutsanga 「土」の意味）よ、母なる者よ、あの者がムハッソとともにこの者の名をくちにする事あれば、汝その者を背中に負い、その者を運び、その者を覆え。その者が、土に戻るまで。しかしこの者、カハソ自身については、人に妖術をかけず、また人から妖術をかけられることもない（kaloga na kalogbwa）。お前、カハソを背中に負い、つねに彼女とともにあれ。なぜならお前こそ母なる者。ブッ。」

（２）黒いムハッソとトウモロコシの粉を使って、地面に「罨（muhambo）」が描かれる。「罨」に引かれた線の本数は6本。この本数は使用するムハッソによって異なるという。

（３）カハソは人頭の瓢箪が置いてある方から罨に入り、3回往復した後、人頭の瓢箪

の方を向いて脚を投げ出した格好で罾の上に腰を下ろす。



罾

(4) キメラ、「赤い鶏 (kuku wa kundu)」（褐色の鶏）を右手に持ち、左手でその羽毛をむしりつつ唱えごとを述べながら、患者の周りを反時計回りに7回周回する。

「サラマ、サラミーニ。赤い鶏はお前だ。この者がカハソ。カハソは言い争っている。彼女が言い争っていないと言えは嘘になる。彼女は内に埋め隠されている。その喧嘩は隠れた喧嘩だ。私は、(カハソたちについて) あいつらはひどい奴らだ、傲慢な奴らだと噂されているのを耳にした。あいつを殺したいという声さえ、私たちは耳にした。私は通りすがりの者。人びとが言うのを耳にする。「あいつらは傲慢だ、あの屋敷の女性たちは。つんとお高く留まりやがって。」

(彼らがそんな風に悪口を言う) 理由は、私たちにはわからない。(カハソたちは) 人妻だ。そして人妻は観察される者。あまりにひどい悪口なら、本人たちにも伝えてあげるものだろう。あいつらは誰の名前を口にするかといえば、決まって彼女たちのこと。この屋敷の畑仕事ぶり。トウモロコシも底をつくことがない。でも、そんな風に言うあいつらにも、同じように雨が降らないとでもいうのだろうか。雨は天空神のもの。収穫も天空神のもの。しかし耕作は競争のようなもの。腰を折る者(勤勉に働く者)もいれば、腰を折らない者(怠け者)もいる。腰を折った者こそ、トウモロコシを手に入れる者。そうじゃないだろうか。なのに、彼女ら(カハソたち)は収穫を得たことで憎まれる。傲慢だという噂がたつ。でも最初は夫についての評判だった。チョガさん。今やチョガも死んでしまった。もはやいない。それを望んだ者は、大喜び。残されたのは、その妻たちだ。(彼らの言うことには)「あいつらは傲慢だ。でも今やチョガは死んだ。」でも豊作は屋敷から去ってしまっただろうか?そもそも彼らが殺したのは怠け者の方。妻たちこそが働き手。チョガは畑仕事なんかしなかった。無駄な人殺しだ。」

(カハソが口を挟む)

「私たちが耕して、彼ときたら満腹するまで食べるだけ。」

(唱えごと再開)

「あいつら(妖術使いたち)はまず彼(チョガ)が物を食べられないようにしてしまった。そして今や、このカハソだ。彼女こそ、今や最もひどく妖術をかけられている者だ。それとあちらのヂネ。二人が妖術をかけられている。でも、どうだろう?すべては神の思し召し次第では

ないだろうか？私は神に祈る。

さて今、私はこの者のなかにキテマ (chitema) を注ぎ込む。キテマそのものを。キテマよ、お前、背中を曲げる者、肺を切り裂く者、腸を切り裂く者。お前、キテマよ。お前の鶏は赤い雌鶏だ。

さてこれより、敵意の心をもってカハソの身体について口にする者があれば、お前キテマよ、私はお前に命じる。肺を切り裂け、腸を切り裂け、胃を切り裂け、心臓を切り裂け。血を噴出せ、前（性器）からも後ろ（肛門）からも。もし私が言っていることが正しいならば。

私はお前をこの者の身体の中に置く、お前キテマよ。ただ身体の中にいるようにと置いたわけではない。私はお前をこの者の見張り (murinzi) として置く。お前キテマよ。16 枚の剃刀の刃。前と後に。腎臓に 8 枚、もう一方の腎臓に 8 枚。ザクザク (phyaka phyaka) 切り刻め。16 枚の剃刀の刃。8 枚、8 枚。腰に 8 枚、下腹部に 8 枚。まっすぐに切り裂け。かの者（妖術使い）を切り裂き、引き摺り下ろせ。かの者を切り裂き、引き摺り下ろせ。これより、悪事をなしたる者（妖術使い）、その者には道連れはいない。彼の道連れは白布（死体を包む）と板（墓のなかに敷く）だ。私はそう命じる。

私は誰のために呪詛している (kpwapiza) のか？私はこのカハソのために呪詛している。そして赤い鶏はお前だ。私はあらゆる方角に呪詛する。私はムズカの主ムギシ（イスラム系の憑依霊）についても呪詛する。妖術使いが（ムズカの）洞窟へ行き、呪詛しに行く。誰に見られるというのだろう。だが、私は命じる。彼が洞窟に着き、そして出てくるとき、まず頭痛から始めよ。そして彼が屋敷に帰りつくと、彼にはもはや道連れはいない。彼の道連れは白布と板。とっとと埋葬されてしまえ。私はそう命じる。このカハソのために。

私はカハソが妖術にかけられてほしくない。この「私はほしくない (tsenzi)」を、神がしっかり受け止めてくださるように。そして私はまた、彼女の身体について（妖術使いの）悪い言葉とともに口にされても「ほしくない」。なぜなら彼女は、他人の物を食べたりはしない。他人の汗を食べたりしない。他人の場所にいかない。彼女のことを口にするあのものよ、あいつらよ、太陽が沈む先（死者の地下世界）へ立ち去れ。

私はお前を盗んではない。まったくもって盗んだりしてはいない。私はシモニ（地名）のキフンジ・ベドドからお前を買った。私はお前を施術してもらった。その通りだろう？そして私自身、お前が多くの人を殺すのを見た。かの者（キメラを攻撃した妖術使い）に仕事をさせよ（妖術をかけさせよ）。そうすれば彼は不思議に見舞われる。どこからやってきたのかもわからない不思議に。身体のかなかに大きな荷物を抱え込む。そしてまさにそのとおりだった。白布と板だ。また私に爪をかけようとした別のやつは、的を外し、足を滑らせ、もう少しで地面に膝をつく（死ぬ）ところだった。私は彼を許してやった。彼も二度と私につきまとわなくなった。私は今、再びお前にこんな風に仕事をしてほしいのだ。私に対してそうしたように、彼女とともにあれ。ムヒは、ほかでもないお前だ。お前よ、この者のために使役されよ。今日この日より、かの者も、足を滑らせ、死ぬように。私はお前を使役する。人を殺せと。人を殺せ。お前よ、人を殺せ。人を殺せ。今日、これより、私はお前をカハソの身体に注ぎ込む。そこに腰を

落ち着け、かの罪人（mudambi 妖術使いのこと）がやって来るのを待て。」

（5）薬液にアフリカマイマイの中のムハッソを加え、鶏の足を握って、鶏を薬液に浸し、それで患者の全身に薬液を数回散布する。

「彼女の名前がムズカで口にされることのないように。彼女の名前がムハッソの前で口にされることのないように。彼女の名前を口にする者あれば、お前キテマに捕らえられんことを。頭よ痛み、石で打たれよ。頭よ割れよ。耳よ、棘で刺されよ。剃刀の刃、前と後、ザクザク。これこそ私が命じること。赤い鶏はお前だ。

私はお前を授けられた。お前を人の身体をクフィニャするために授けられたのであって、人々に妖術をかけるために授けられたのではない。私はお前をキラボとして置く。彼女の身体を見張れ。彼女は誰かと争おうとしているか？」

（カハソが応える）

「争う気はありません。」

「私はたとえば自分のマンゴーが食べられているのを見て、あるいは自分のサトウキビが食べられているのを見て、キラボを置く。誰かがやって来てキラボに捕らえられるなら、私のせいだろうか？（もちろん盗んだ者が悪いのだ）。さて、私は彼女のこの身体をキラボにする。私はこの身体にキラボを注ぎ込む。（悪意をもって）彼女の名前を口にする者あれば、口にされたその名がこのムヒに取り上げられる。私は命じた。かの地には決して開かれることのない小さな小屋がある（墓穴のこと）。それを開くのは、涙と鼻水。かの者よ、そこに行ってしまう。」

（人々、唱和する）

「行ってしまう。」

（6）鶏の胸にムハッソを塗りつけ、その鶏で患者の身体をこする。

「サラマ、サラミーニ。さて今、お前、マフンガよ。すべてを封じる（ufungaye）者よ。全方を封じよ。彼女がフルモヨと出会おうとも。今、私は命じる。あらゆることを封じよ。私はこの薬液で彼女を洗う。しかる後に、私は彼女をしっかりとクツォザ（kutsodza 皮膚に剃刀で傷を入れてムハッソをすりこむこと）する。私はお前、キカゴ（chikago 防御施術）を注ぎ込む。これより、両の手をもってこの者を握り、この者を背負うように。」

（7）鶏の爪を切り落とし、切り口にムハッソをつけ、患者の額、喉もと、胸、背中にムハッソをつける。切り落とした傷口から滲み出る血を、薬液に加える。

（8）人頭の瓢箪を左手に持ち、右手で栓を上下させながら唱えごと。これは声には出されず、聞き取れないように口の中で唱えられる。

（9）患者の手をとって立ち上がらせ、患者の足元に薬液をかける。その後患者は、自分で薬液で手足、顔を洗うよう言われる。

（10）残った薬液で畏を消す。

（11）続いて同様な手順で、カハソの僚妻ヂネに対してもクフィニユワ・キルメが行われる。（以下省略）

（12）ヂネに対する施術の終了後、カハソ、ヂネ兩名に対してクツォザが行われる。

解説

この施術が、すでに紹介したクブエンドウラの施術ときわめて似通ったものであることに気づかれることだろう。ムハツソを用いて地面に描画する罫。その上に患者を座らせて、キリャンゴナの鶏の羽毛を筆りつつ行う周回。鶏を用いての患者に対する薬液の散布と塗布。薬液による沐浴と罫の消去。皮膚の切り傷からのムハツソの体内への擦り込み（クツォザ）。これだけを見ると、クブエンドウラの数倍以上する高額な施術料金にもかかわらず、むしろ逆にそれをおを簡略化したものであるかのように見えるだろう。少なくともクブエンドウラでは鶏は3羽使い、鶏ごとに周回と薬液の散布など一連の手続きが繰り返されなければならなかったのだから。にもかかわらず、クフィニューワ・キルメはクブエンドウラよりも「大きく (ubomu)」たいへんな施術であるとされている。

クブエンドウラの施術は、妖術使いが用いたムハツソで描いた罫に患者をかけ直し、そのうえでムハツソに対して、妖術使いが用いたコマンドとは正反対のコマンドを与え、妖術使いのコマンドを上書きしてしまうという操作であった。その作業は、妖術使いが行うと想像されている作業とほとんど同じであり、施術師たちもそのことを認めていた。ある施術師は、それを妖術使いがムハツソを用いて行っていることの「真似をしている (kuigiza)」のだと説明していた。

しかしクフィニューワ・キルメにおいては、両者の作業の同一性はよりあからさまである。

(1) で行われる、ムハツソに対するキメラの冒頭の唱えごとでは「妖術をかける (ku-loga)」という言葉が自分が行おうとする行為をさすのに、ためらうことなく使われている。

「今、私はこの者 (カハツ) にしっかりと妖術をかける (Vivi ninamuloga kamare kamare yuyu mutu.)」

もちろんこれは患者に危害を加えるという意味ではない。クロガは、施術師が用いる意味ではおそらく単に、人を罫にかけてムハツソの支配下に置く、というぐらゐの意味なのかもしれない。ムハツソに、罫にかけた者に危害を加えよという命令が与えられていれば、それは通常の妖術になる。ここで患者を罫にかけたうえでムハツソに下されている命令は、しかしながら、クブエンドウラのとくのような平和的な内容——患者を解き放て——ではない。患者を妖術で攻撃しようとする者に対しては、容赦がない。繰り返し、殺せという命令が出されている。どうもあまり穏やかではない。おそらくこの人の殺害を命じることになるという事実が、この施術をして「大きい」と称す所以なのであろう。

またこの冒頭の短い唱えごとには、この施術のもう一つの特徴もはっきり言及されている。この施術を受ける者自身は、以後「人に妖術をかけず、また人から妖術をかけられることもない。」と宣言されている。

(1) の唱えごとの中で呼びかけられているキテマ (chitema) ——「斬る、切断する」を意味する動詞クテマ (ku-tema) に関係がある——と、「土」を意味するムツァンガ (mutsanga)、さらに (6) の唱えごとで呼びかけられているマフンガ (mafunga) ——「閉じる、縛る

(ku-funga)」より——の3つが、単一のムハツの成分の名前なのか、それぞれが別のムハツであるのかはわからない。後者の場合、アフリカマイマイの殻の中身の黒い粉は、複数のムハツの混合物であることになろう。

クフィニューワ・キルメの施術の中心は、患者を罌に座らせた後の、(4)「赤い鶏」による周回である。前半では、患者がこの施術を受けるに至った経緯が詳しく述べられている。彼女らの屋敷の畑の収穫の多さが近隣の人々の妬みを買ったこと。彼らのなかにいる妖術使いたちによって、まず彼女らの夫が攻撃対象となり殺され、いまや彼女らにも災いが及んでいること。彼女らの屋敷の繁栄は彼女ら自身の努力の賜物であり、今後も続くだろうが、妖術使いはおそらく、屋敷の繁栄が続く限りは攻撃を止めないであろう。クフィニューワ・キルメが必要になる道理である。

唱えごとは続いて、ムハツ——ここではキテマが主役であるようだ——に対するコマンドを具体的かつ詳細に展開する。その内容のすさまじさは、クブェンドゥラとは比べ物にならない。殺害がその詳細な方法とともに生々しく記述される。この部分だけ聞くと、まるで妖術使いの唱えごとを聞いているかのようなようだ。攻撃の対象となる行為は単に妖術一般だけではなく、ムズカを利用した「汚れを奪う」妖術や、ムズカ祈願も攻撃の対象として明言されている。

続いて、すべてのムハツに対する唱えごとに不可欠な構成要素である、ムハツの購入履歴が語られている。キメラ自身が、かつてこの施術を施され、その効き目に感銘を受けて購入に至ったらしいことがわかる。唱えごとの最後は、再びムハツに対するコマンドによって締めくくられる。「人を殺せ (molage mutu)」が執拗に4回も繰り返されるのが、鬼気迫る。

ムハツで描画された罌にかかり、赤い鶏に周回され、ムハツの入った薬液を浴び、鶏の脚の切り口を用いてムハツを身体の各部に塗られ、締めくくりはクツォザ、つまりムハツを剃刀を使って身体——四肢の各関節、胸部、背中——につけられた傷口からすり込まれる。こうして患者にキラボとしてのムハツが文字通り「注入され」、患者は妖術使いの攻撃に対する防御を手に入れる。ムハツは、もし患者が妖術を使うと、患者自身を攻撃するだろう。患者は妖術使用を禁止されることにもなる。

クブェンドゥラの施術で述べたこと、つまり妖術に対処するための施術行為と妖術との本質的同質性は、クフィニューワ・キルメの施術では一層はっきりしている。しかしここでも、すでに述べた指摘を繰り返す必要がある。妖術の行為そのものは想像的なものであって、施術がその模倣であるような先行事実を提供しているわけではないという点である。実際に取り行なわれる現実の行為としての施術が、単なる想像的であっただけの妖術行為に、むしろ現実性を与えているのである。キメラ氏が経験したように、この施術を施された後に、自分を攻撃している下手人に違いないと疑っていた人物の誰かに何か災いが起こると——本当の下手人について確信がもてず、被疑者の範囲が極めて広いときにはおおいにありうることなのだが——それはこの施術の効力の証となる。しかしそのことは、同じよう

にムハツソに他人の死や不幸を命令する妖術使いの行為にもどのような効力があるということの証でもあるのだ。施術はこの点でも妖術の現実可能性を補強してしまうのである。

演出の効用

特別な「演出」臭が比較的希薄な上で紹介したような施術に対して、他の施術師の中には同じクフィニューワ・キルメの施術にさまざまな仕掛けや不思議を盛り込んでいる者もいる。施術師の側でクライアントを騙してやろうとか、驚かしてやろうという特別な意図がなかったとしても、施術にさまざまな「不思議の見掛け」が組み込まれていくことを不可避にするプロセスがありうることについては、別の論文で示した（浜本 2010）。妖術使いに関するあれこれが現実的な可能性として前提とされている社会空間において、常人にはとてもまねできない不思議な術を駆使すると考えられている妖術使いに対抗する側にも、同様な不思議が期待されたとしても無理もないだろう。こうした想像空間における淘汰圧のもとでは、ありふれた月並みな技法と、驚くべき不思議を現出させる技法があるならば、後者の方が多くのクライアントに求められ、それゆえ多くの弟子に継承され広まっていくのは、あまりにも当然のなりゆきである。ただ想像されただけの妖術使いの技に対して、こちらは現実の行為で対抗するのであるから、そこになにか驚くべき不思議が含まれているとしても、そのほとんどは見掛けとして作り出されるしかない。見掛けの造出は、不発や仕掛けの暴露や無様な失態と背中合わせであるので、それにあまりに多くを頼るのは危険すぎる。おそらく施術の効力そのものは、それに依存しない部分で保証されている必要があることになるだろう。

本節では、そうした例を一つ挙げておきたい。前出の施術師キメラ氏自身が、彼の家族に生じるさまざまな問題が妖術使い——その正体についてキメラ本人はかなり確信に近いものをもって——の執拗な攻撃によるものであると考えており、彼の妻の自殺未遂という決定的な事件をきっかけに、遠方の有名な施術師によるクフィニューワ・キルメの施術を求めることになった。その施術は、単に通常の妖術だけでなく、イスラム系の妖術に対しても有効であるとされ、その効き目も長い——そのムハツソは10年くらいは身体の中にとどまって効力を発揮し続けるととされていた。さらにその施術師の使う瓢箪は、自分で歩き回る能力をもった不思議な瓢箪だということでも有名であった。そのことに対する興味から私もその施術師の屋敷への訪問に同行することにしたのだが、他人の屋敷を泊まり歩きながら徒歩で3日かかったその旅は、同行を決意したことをただちに後悔したほど私にとっては過酷な旅だった。土地の人々の目から見ても僻遠のブッシュの奥の彼の屋敷にようやくたどり着き、客人としての歓待は受けたものの、老齢の施術師デレ（仮名）は自分の年齢と遠方を理由に施術に来ることを拒んだ。これには我々も失望と怒りを禁じえなかったのだが、キメラは根気よく口説き続け、ついにその老施術師は自分の代わりに孫息子の一人デレ（仮名）をキメラの屋敷に送ることに同意した（註 祖父）。まだ10代後半のその孫息子は、老施術師の弟子（mwanamadzi）ですでにこの施術に用いるムハツソを老施

術師から購入していた。ただし、まだ彼自身の瓢箪は持っていなかった。老施術師は、この孫息子に自分の瓢箪を託し、キメラの屋敷で施術を行ってくるように言った。ただし出発前に、ムハツソに対して老施術師は念のために唱えごとを済ませ、キメラの屋敷ではあらためて唱えごとをしないでもよいよう段取りした。

施術は多くの作業からなるものだった。朝一番で薬液 (vuo) が用意された。屋敷の近くで手に入るマヴィマヴィと呼ばれる——揉むと糞便 (mavi) のような匂いがすることから——と、ムボノチラー——産婦に対する施術にも用いられることで知られている——の二つが主成分で、それに少年が持参してきた瓶に入ったムハツソが加えられ、水の中でよく揉み砕く。「冷たい木」を主成分とする冷やしの施術で用いる薬液とも、憑依霊関係の施術に用いる薬液とも、成分は共通しない。

瓶のムハツソに対してはデレ少年自らが唱えごとを行った。

「ムヒは奴隷、使役される。穢れたるムハリブ、穢れたるムハリブ、穢れたるムハリブ、それがお前。お前は穢れたる者たち。バディリは汚い、キラボは汚い。今私は命じる、かの者 (患者) は喰われないと。彼はジネには喰われない。喰われない。喰われない。お前、ムァンガの妻よ、襲い掛かる者よ。110の山を越えて、お前は人に向かって投げつけられる。たとえナイロビにいようとも、お前は行ってその者を食らい、またここに帰ってくる。ここに帰ってくると思えば、またあっちに行き、人を喰らう。しかし今ここで私は命じる。この者たちは喰われることはない。この者たちはジネには喰われない、喰われない。お前、フンガムィリよ、フンガムィリよ。... (以下、その他のムハツソ (あるいは成分) についても同様に繰り返される) ... 私はお前たちを盗んでいない。私はお前を祖父デレから代金の支払いとともに与えられた。お前たちが人を喰らったのは昨日、一昨日のこと。しかし今私は命じる。これらの者は喰われない。これらの者の身体に、今から私は毒を注ぎ込む。毒とはお前たち、穢れたるムハリブ、フンガムィリ、ムァンガの妻、110の山を越えて人を襲う者。」



唱えごとを行うデレ少年

次いで患者家族の構成員全員のための護符 (pingu) ——通常の妖術攻撃に対して身体を守るために身につけるものと、ジネ (jine) と呼ばれる悪霊を駆使するイスラム系の妖術攻撃に対するもの、それぞれ一つずつ——に加えて、屋敷内のすべての小屋の戸口、家畜囲いの入り口に埋める護符の作成にとりかかるが、これは朝9時に始まり午後2時によく終わった。いずれの護符にも、前出の瓶に詰めたムハツと、祖父の人頭の瓢箪のムハツ、ジネのためのムハツ (香辛料のミックス) が用いられている。家族の一人一人が身につける護符は、最後に前出の薬液に浸して完成する。屋敷内の戸口の地下に埋められる護符には、屋敷の全方位から採って混ぜ合わされた土が加えられる。この後、施術は次のような手順で進行した。

(1) 屋敷の構成員全員が一人一人、薬液で全身を洗う。ただし頭部にはつけぬようにと言われる。

(2) 次いでデレは、上半身裸になった屋敷の人々一人ずつの身体に灰を使って線を描いていく。剃刀の刃で切り傷を入れる部位の印であるという。

(3) キメラ氏、憑依霊をもっている者に対して、身体にナイフで傷つけることの許しを乞い、またイスラム系の憑依霊たちに黒いムハツを用いるが、驚かないでほしいと唱えごとを行う。

(4) デレ、クツォザを行う。一人一人の身体につけた灰の印に沿って剃刀の刃で切り傷をつけていく。



クツォザ施術

(5) (A) ジネのためのムハツ (香辛料のミックス)、(B) 少年が持参した瓶に入ったムハツ、(C) ここではじめて登場する別の瓶に入ったムハツ、(D) 祖父の人頭の瓢箪に入ったムハツが、傷口にこの順番で刷り込まれていく。(A) と (B) は、そして (C) と (D) はそれぞれ同じ傷口に重ねてすり込まれる。刷り込みに先立って、デレは自分が持参した (B) のムハツに対しては再び先と同様な唱えごとを行う。(C) と (D) については、出発前に祖父がすでに唱えごとを済ませている。

この施術の見せ場は、最後に祖父の人頭の瓢箪のムハツソをすり込む場面である。この瓢箪こそ、自分で歩き回ることによって有名な瓢箪なのである。デレは患者の頭にこの瓢箪を置き、人頭の栓を上下させる。そして歌を歌う。すると瓢箪は歌にあわせて身体を這い回るように移動し、患者の尻まで来ると地面に降り、そのまま患者の周りを周回する...はずだった。歌は次の通り。特に重要な内容は含まれていない。

「ほどきなさい。私の故郷は遠い、ウェー。(繰り返し)

頭はほどかれ、足もほどかれる、ウェー。

頭は冷やされ、心も冷やされる、ウェー。

腹も冷やされ、心はほどかれる、ウェー。

ほどきなさい。私の故郷は遠い、ウェー。」

「私はお店に着物を買いに参ります。

なんの着物なの、おかあさん、なんの着物。

ハーハー、ガラスの着物だよ、おかあさん。」

おそらく、老施術師デレが施術していたなら、瓢箪はまるで命あるもののように、自分から先導して移動しているように見えたに違いない。だが、残念ながら見習い施術師の孫息子には、これは荷が重すぎた。誰が見ても、少年が自分で瓢箪を動かしているようにしか見えないのである。私は思わず心の中で声援を送っていたが、失敗は誰の目にも明らかだった。



自分で歩き回る瓢箪（お前が動かしたるがな）

しかし、私がさらに驚いたのは、屋敷の誰もこの失敗を問題にしているようには見えないという点だった。施術は滞りなく終了し、キメラ氏は約束していた2500シリングという当時としては高額な料金——キメラ自身が自分の施術に対して要求する金額の2倍以上になる——を支払ったのである。私はキメラにおずおずと、あの瓢箪が自分で歩き回るといふ瓢箪なのか、私にはデレが動かしているようにしか見えなかったが、と尋ねてみた。キメラはこともなげに、まだ子供だから慣れていないのだ、彼もそのうちに慣れるだろうよと答えた。でもムハツソは、ちゃんと仕事をするだろうと。施術師同士の了解事項なのだろうか。もしかしたら一般の人々であれば、デレの施術に大いに失望したということもありうる。しかしキメラにとっては、重要なのはムハツソとその効力であり、瓢箪が自分で動いているように見えようと、明らかに施術師がそれを演出していることがばれれば

あろうとも、施術の効力自身には何の関係もないかのようであった。

不思議の見掛けの演出についての施術師たちの見解がどうであれ、妖術使いたちがありとあらゆる不思議をやったのける存在として思い描かれている限り、それに対抗する施術の側にそうした見掛けが——施術師たちの欺瞞の意図の有無や、そうした見掛けの効用についての評価とは無関係に——ともなうことはほとんど自然な過程である。しかしそれが首尾よく成し遂げられるとき、そこに出現するのは、妖術使いの行うとされる想像された不思議の数々ではなく、人々の眼前に展開する現実の不思議となり、再び想像上の妖術使いの行う不思議に現実的な支えを与えてしまうことになる。オリジナルを欠いた模倣が、存在しないオリジナルに現実性を付与してしまうという、繰り返し指摘してきた関係がここにも見られるのである。

フィンゴの埋設：屋敷全体に対する防御施術

クフィニューワ・キルメは基本的には個人を妖術使いの攻撃から守る防御施術である。それに対して、屋敷全体を妖術使いの攻撃から守る施術も存在する。クフィニューワ・キルメの効き目に有効期限がある——普通はムハツは数年しか身体にとどまらないと言われている——のに対し、後者の効き目はほぼ永久に続く。しかしこの種の地面に埋設されるムハツ——フィンゴ (fingo) と総称される——は、それに対して定期的に供物を捧げる必要があり、それを長年にわたって怠ると血を求めて屋敷の住人を襲いだすともされている。どちらの防御法も一長一短というわけである。

こちらにも施術には施術師ごとにさまざまな流儀があるが、クフィニューワ・キルメの施術師がムハツについての専門知識の持ち主としての側面で、妖術使いの同じ側面の鏡像となっているとすれば、フィンゴの施術師の場合には、その奇矯な振る舞いの側面が強調されているように思われた。一例として1996年に行われたキティマンゲと名乗る施術師の施術の事例を紹介する（註 本名）。この施術師は1957年生まれで、遠方から請われて施術にやっていた。彼の埋設するフィンゴはムパングーラ (mupangula) というもので、ヒツジの頭蓋にムハツを詰めたものであるという。その施術が行われた屋敷は、隣人と土地をめぐる紛争のまっただ中であつた。屋敷の長は、隣人たちが自分たちを追い出そうと画策しており、隣人の妖術の結果としてモンバサに出稼ぎに行っている息子の失職や、別の息子の交通事故など、さまざまな災いに見舞われている、自分は喧嘩は好まないのだが、これ以上相手のなすがままに甘んじているわけにはいかないと、静かにしかし怒気をこめて語った。結婚に失敗し、彼の屋敷で暮らしている彼の姉が私の友人の一人の分類上の交差イトコ——交差イトコどうしは制度的に「冗談関係」にあり、会うと悪口や冗談を言い合う関係である——であつたこともあり、また彼の妻が私の分類上の娘であることもあつて、調査の都度一度は挨拶に顔を出すのが習慣になっていた。この年も、たまたま挨拶に訪れた際に、偶然この施術に遭遇したのだった。

(1) 小屋の戸口の外に、死者を埋葬する際にまく白布でつつんだムパングーラが置かれ

ている。キティマンゲは屋敷の男たちと小屋の中でヤシ酒を飲んでいる。3人ですでに1リットルほど飲んでおり、酩酊状態。

(2) キティマンゲは、集まっている屋敷の人々全員の額に、レイヨウの角に入った黒いムハツを塗って回る。「これから起こることを見ても死なない」ようにする予防措置とのこと。

(3) キティマンゲ、小屋の中から全裸で出てきて、人々の前で放尿する。屋敷の長、キティマンゲの指示通りに、白布の包みの左右にキティマンゲ所有の人頭の瓢箪と、通常の瓢箪を置き、乳香をくゆらせる。

(4) キティマンゲ、小屋の中で歌い始める。外の人々もそれに唱和し、手拍子を打つ。

(5) キティマンゲ、小屋の中から再び全裸で登場し、二人で白布の包みの両端をもって出発する。他の人々も歌いながら列を作って続く。

(6) 屋敷のはずれのムコネの木の根元に、すでに穴が掘ってある。人々、木の周りを埋葬歌を歌いながら周回する。



フィンゴを白布で包んでブッシュへ向う



ムコネの木の下で踊るキティマンゲ

(7) この間に、キティマンゲは白布の中のムパングーラを穴に埋め、自分の尻とペニスを用いて、砂を寄せて穴を埋める。屋敷の若者の一人が助手を務める。穴の上に、彼の瓢

篋が3つ固めて置かれる。

(8) 穴の周囲に灰とトウモロコシ粉で半径30センチくらいの円を描き、そこに灯油を垂らして火をつける。

(9) キティマンゲ、燃えている火を自分の尻で消火する。

(10) 穴の周りに短い杭が3本打ち込まれ、その上に平らな石板が置かれる。

(11) キティマンゲ、鶏を屠殺しその血を石板に注ぎ、さらに人々の面前で石板に放尿する。

(12) 屋敷の人々全員をクツォザし、施術終了。



燃える炎を尻で消す



フィンゴに鶏の血を捧げる

フィンゴの作成とムハツに対する唱えごとは、私の到着前にすでに済んでいたもので、私が見たのは、作成したフィンゴを埋設するパフォーマンスの部分だけだった。上記(1)から(12)までの過程に唱えごとの類は一切なく、とりわけ(6)から(11)までは屋敷の人々は歌を歌いながら周回を続けているのだが、そのなかで施術師はまるでパントマイムでもしているかのように、大げさな身振りで無言でこれらの作業を遂行していた。フィンゴは、ガラス瓶(コーラの空き瓶など)にムハツを詰めて作られることもあるが、80年代半ば以降、とりわけ後述するマジユトの「抗妖術使い運動」以後は、羊の頭蓋骨にムハツを詰めるのが流行になっていた。フィンゴの埋設が埋葬になぞらえられているのも、多くのこの種の施術に見られる特徴である。施術師の中には、2006年にこの地域で起こった大規模な抗妖術使い運動(実際には妖術使い狩り)で有名になった施術師カロロのように、この「埋葬」をたんたんと——歌も踊りも、その他、人を驚かせる演出抜きで—

一執り行う者もいるが、キティマンゲのように奇を衒ったやり方でそれを行う者もいる。灯油を垂らして火を点け、それを尻で消すという趣向は初めて見たもので、彼自身の創出した趣向かもしれないが、その他の特徴、人々の面前での放尿や、全裸での施術、埋葬歌と踊りなどは、この施術によく見られる特徴である。

これらの一連の「演出」あるいは施術のやり方が、特定の施術師個人の意図的な創案、つまり見物人への効果を狙った工夫から始まったと考える必要はここでもない。何代にもわたる施術師の技の継承の過程で、偶然付け加わったり、理由なく気まぐれに変更されたりしたさまざまな要素が、施術を取り巻く想像力——それは妖術をめぐる想像力に他ならないのだが——の淘汰圧の下で、たまたま選ばれ生き延びてきたのだと考えた方が理にかなっている。結果的にそれらは、妖術をめぐる想像力の空間の構造を映し出すことになる。フィンゴを埋設する防御施術においては、「演出」は妖術をめぐる想像力のもう一つのベクトルに沿っているように見える。妖術使いをめぐる第二のイメージである、常人の良き振る舞いを転倒した異常な振る舞いが、ここでは模倣されている。

妖術使いが夜、誰にも知られることなく、全裸で犠牲者の屋敷に侵入し、犠牲者の死を先取りする卑猥な埋葬歌や服喪歌を踊り歌って妖術をかけるのに対して、フィンゴを据える施術師たちは、キティマンゲのように昼間、人々が見守る中で、全裸で埋葬歌を踊り歌いながら、フィンゴを据える。それはムハツソによって前もって処置しておかない限り見た者に死をもたらす、つまり見てはならない類の振る舞いだと言われている。それは、人々にとっての正しい秩序を転倒させたものである妖術使いの姿、現実には目撃することの不可能な姿を、まざまざと見せ付けるその鏡に映った似姿でありながら、その要素を部分的に再び転倒させることによって、妖術使いに対する同質性と異質性をたくみに打ち立てているのである。クブエンドウラやクフィニユワ・キルメを行うムハツソを核にした施術師たちが、ムハツソの知識を駆使する妖術使いを転倒させた鏡像であるように、フィンゴを据える施術師たちも、一種の転倒した妖術使い——夜踊る者としての——なのだ。そして、ここでも再び、彼らの現実的で観察可能な存在と振る舞いが、想像的で観察不可能な妖術使いの存在と振る舞いに、逆に現実性を与えてしまうことになる。

註

(註 費用) 施術の費用は、施術師の知名度等によってさまざまであるが、1990年代半ばの相場では、前章で登場したキメラ氏の場合、クブエンドウラの費用が200シリング(当時のレートで約1200円)であったのに対し、彼が行う個人に対する防御施術は1200シリングであった(実際には半額で施術することもあった)。屋敷全体に対する施術の場合当時の相場は2000シリングほどだった。2007年に私が見た屋敷に対する防御施術は8000から12000シリング(当時のレートで16000円から24000円)で、かなり値上がりしていた。

(註 祖父) 祖父と孫息子の代の個人名は同じ名前群から付けられる。つまり男は自分の息

子に、自分の父親やその兄弟たちの名前のどれかをつける。祖父と孫息子が同じ名前であることも、したがって、ごく普通のことである。

(註 本名) キティマンゲ (Chitimange) は実際に彼がその頃名乗っていた名前であるが、こうした施術名 (dzina ra chiganga) はもちろん本名ではない。職業上の名前であり、変化しうる。彼は現在は別の名前を名乗っている。